

氏名	那 須 保 友		
学位の種類	医 学 博 士		
学位授与番号	甲 第 615 号		
学位授与の日付	昭和61年3月31日		
学位授与の要件	医学研究科外科系泌尿器科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)		
学位論文題目	膀胱腫瘍における malignant potentialの指標としての ABH- isoantigen PAP法による染色パターンに基づく判定基準の作成 ならびにCEA、Fibronectinとの関連性		
論文審査委員	教授 赤木忠厚	教授 粟井通泰	教授 折田薫三

学位論文内容の要旨

膀胱腫瘍における血液型抗原(BGA)を peroxidase-antiperoxidase法(PAP法)を用いて検出し、その染色のパターン分類をおこない、さらにBGA 消失についての臨床応用可能な判定基準の作成を目的として各染色パターンと表在性腫瘍の予後との関係について検討をおこなった。さらに他のマーカーとしてcarcinoembryonic antigen(CEA), fibronectin (FN)を同一の組織においてPAP法にて検出しその組織内分布と malignant potential の指標としての有用性ならびに BGA 消失との関連性について検討を加えた。

その結果 BGA の染色のパターンは、type I, II, IIIa, IIIb, IV に分類可能であったが各typeと腫瘍の組織学的異型度との間には明らかな相関関係は認められなかった。CEAの陽性率は129例全体では10.1%, 表在性腫瘍で11.6%であり、組織学的異型度との関係では、G3においてやや高い陽性率を示した。FNの陰性率は全体で26.8%であり、組織学的深達度と相関する傾向が認められた。

表在性腫瘍86例中再発を来したのは50例(58.1%)であり、再発時に筋層を越える浸潤癌に進展または転移を生じた症例を10例認めた。この10例はtype IIIbもしくはtype IVに属しており BGA 消失の判定基準としてtype I, IIを陽性、type IIIaを疑陽性(判定保留)、type IIIb, IVを陰性とするのが今回の成績より適切であると考えられた。またCEA, FN単独では malignant potentialの指標としてはBGAに劣るものと考えられた。さらに、BGAとCEAもしくはFNを組み合わせることの有用性も特に認められなかった。

論文審査の結果の要旨

本研究は膀胱腫瘍における血液型抗原の PAP 法による染色パターンを分類し、血液型抗原の染色パターンが表在性膀胱腫瘍の malignant potential の有用な指標となることを明らかにした価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。